

---

# 頭痛

花浅葱羽羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

頭痛

### 【コード】

N0811N

### 【作者名】

花浅葱羽羅

### 【あらすじ】

男は頭痛に悩まされていたのです。

頭が痛いのだ。それはもう大きな金槌でどおんと叩かれた様な、重く響く痛みだ。理由はさっぱり見当たらない。兎に角朝起きたらもう頭が痛かったのだ。少々理不尽だと思いつつ、男はふと何の拍子も無く水瓶へと歩きだした。冷たいもので喉を少しでも潤せは少しでもましにはなるかと思つたのだった。のそのそと男は歩く。ゆるりと一回地面を踏むごとにどおんと響く痛み、顔をしかめながら大の大人が歩いていく様は非常に滑稽な姿<sup>ザマ</sup>だった。

みいんみいと蝉がけたたましく鳴く木の下をくぐってからからと下駄の音を響かせながら水瓶に近づくと、たむろって居た小さな五羽の雀が男を一度だけ見てから飛び立った。笑われている様に見える、男は本日幾度目かの盛大なため息をついた。

水瓶の蓋を静かに外すと、そこには底が綺麗に見えるほど透き通つた水があつた。ほんの少しだけその水の美しさに見惚れてから、近くに置いておいた柄杓を手に取りゆつくりと柄杓を水に沈める。すると、その水は透明で水あめの様に甘みととろみがあるように男に錯覚させたのだった。

柄杓から椀の様に軽く握りこんだ手に水をすすぐ。手から伝わる冷たい水の感覚に、一度ぶるりと震えてから口を近づける。蝉の聲が一気に遠くなった。冷たい水が暑さでほてっていた喉をすべる様に流れてゆく。その時、まるでその一口は水あめよりも甘いように男は思つたのだった。

柄杓を水瓶の近くに置き、外した時と同様に静かに蓋を閉める。男は鼻歌でも歌うような雰囲気だからからと音を立てて石を渡るように庭を歩いて、自室に向かった。もうあの重く響くような頭痛の

ことなど忘れていたのである。

暑い夏の日差しの下、隣の垣根で五羽の雀がぴいと鳴いた。

(後書き)

実に簡単で単純な男だと、雀は笑ったのでしよう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0811n/>

---

頭痛

2010年10月8日23時14分発行